

で生き続けるであろう。しかしながら、何とか今以上、生息地が破壊されることがなく、武庫川がいつまでも本種の楽園であることを願っている。

最後になりましたが、本種の同定について大変なご教示をいただきました大阪市立自然史博物館の日浦 勇氏およびこの観察記の寄稿を勧めていただきました高橋寿郎氏に心からお礼を申し述べます。

参 考 文 献

北隆館，日本昆虫図鑑。

北隆館，原色昆虫大図鑑Ⅲ。

北隆館，牧野日本植物図鑑。

武庫川研究会，武庫川をさかのぼる。

兵庫県産 *Cryptocephalus* 属ハムシ4種の分布について (兵庫県甲虫相資料・101)

高 橋 寿 郎

ツツハムシ属 (*Cryptocephalus*) のハムシ類は日本にも多く産し (現在 35 種 3 亜種が知られている)，中にはルリツツハムシ，クロボシツツハムシのように大変良く知られた普通種をも含んでいる。よく見れば斑紋のあるもの色彩の美しいものもいて仲々採集しても楽しい。兵庫県下にも，16 種産することが知られていて全部に就いて分布状況を説明すれば良いがそれは次にゆずるとして今回はその内の 4 種 (キベリクロツツハムシ，キボシツツハムシ，オオクロスジツツハムシ，ジュシホシツツハムシ) に就いて県下の分布状況を眺めて見ることにしたい。

○ *Cryptocephalus limbatipennis* Jacoby, 1885 キベリクロツツハムシ

本種は Jacoby 氏により 1885 年 Shimonosuka (Suwa Lake) 産 1 頭によって記載された (Ent. Trans. Soc. Lond., 1885:199)。その後 Gressitt, 木元両博士は "支那・朝鮮のハムシ" のモノグラフを発表された中に本種の分布として E. China (Shantung, Fukien, Kiangsi) を掲げられてなぜか日本をあげておられない (Pac. Ins. Mon., 1A:130, 1961)，同時に中條博士が *C. yanoi* として Lao Shan, nr. Tsingtao から記載された種 (Mushi, 11:161, fig. 1. 1938)，それに Pic 氏が *C. klapperichi* として Fukien から記載された種 (Soc. Ent. Mulhouse, Bull. 1954:54) を共に本種のシノニムとされた。

同じ年中條道夫・木元新作両博士は“日本産ハムシの目録”を發表 (Pacific Insects, Vol. 3, 頁1:134, 1961) された中で今度は分布日本 (本州) として収録され同時に東 正雄氏が大阪の岩湧山から1♂で記載された *C. bilineatus* Linnaeus の var. *moriwakii* (Konchu Kenkyu, Vol. 3, 頁2:29, 1 fig. 1940) を本種と同一種として取扱れた。

木元博士はタイプを British Museum において調べられて黒色味があった個体であるとされ東氏の var. *moriwakii* はこの種そのものであるとされている (Kontyu, Vol. 29:165, 1961). 確に *C. bilineatus* (Linnaeus) は全く違った種である。

中根博士は原色昆虫大図鑑, II で本種を図説された (pl. 163, f. P. 326, 1963) が分布は本州とのみになっている。

木元博士は1964年に“日本及び琉球諸島のハムシ”をまとめられた際本種を図説された, この時は本種の分布を E. China, Japan (Honshu, Kyushu) とされておられる (Jour. Fac. Agr. Kyushu Univ., Vol. 13, 頁1:156, 1964).

以上が大体本種に就いての分類学的文献のすべてであると考えられる。案外と図説されていない種で比較的少い種なのではないかと思っている。食草, 生態などに就いては全く知られていない。現在の分布は E. China, Japan (Honshu, Kyushu) で良いのではないだろうか。

兵庫県下での記録は次の如く大変少い (記録の内筆者採集並びに標本保存のものについてのみデータをつけた)。

産地: 川辺郡猪名川町杉生新田 [仲田, 1979]. 宍粟郡音水 (lex., 21-V-1972). 氷上郡柏原 [山本, 1953, 1958, 木元, 1964]. 養父郡氷の山 (lex., 25-VII-1950). 美方郡浜坂町 [高橋, 1975].

筆者の採集所有している標本の内音水のもは木元博士のものによく似ていると云うことは中根博士の図説されたものにも似ているし, 東氏の図説されたものにも似ていることになるが氷の山産のものはさらに黒色がかって四つの黄斑を有する程度のものでこちらの方こそ変種としたい様な状態である。

○ *Cryptocephalus perelegans* Baly, 1873 キボシツツハムシ

本種は長崎産で Baly 氏により新種記載された (Ent. Soc. Lond. Trans. 1877:88). 1955年には後藤光男氏によって鹿児島県佐多岬産が原色で図説された (原色日本昆虫図鑑, 上, 甲虫編). 分布は本州・四国・九州とのみになっている。5~7月頃得られるが少いと。

中條・木元両博士の“日本のハムシ目録”では分布を日本 (本州, 九州, 屋久島, 口之江良部島) として食草をコナラ, ハハソまたはナラとして記録された (Pacific Insects, Vol. 3, 頁1:135, 1961).

中條博士は奄美大島, 石垣島, 西表島のものを var. *insulanus* として記載され (Nat. Hist.

Soc. Formosa Trans. 25:72, 1935), 後之を亜種と扱って記載され (Taiwan Mus. Quart Jour. Vol. 7, 7, 7:197, 233, 1954), 同時に台湾から subsp. *takasonus* を新に命名された (I. C., PP. 225-227).

中根博士は原色で本種を図説された (原色昆虫大図鑑, Pl. 163, f. 22, P. 326, 1963). その中で奄美諸島, 台湾のものを subsp. *insulanus* と扱われた。食草としてはナラ, クスノキ, カエデ, カンコノキ, モクタチバナをあげられ分布は本州, 九州, 南西諸島, 台湾となっている。

木元博士は "日本及び琉球諸島のハムシ" をまとめられた際, 中條博士が宮古島から記載された *C. takahasii* (Nat. Hist. Soc. Formosa, Trans. 25:73, 1935) を本種のシノニムとして処理された (Jour. Fac. Agr. Kyushu Univ., Vol. 1:152, 1964). 同時に分布を台湾, 琉球諸島 (宮古, 西表, 石垣, 沖縄, 奄美大島, トカラ諸島), 日本 (本州, 四国, 九州, 屋久島, 種子島, 口之沖良部島) としておられる。 *C. takahasii* は中根博士は独立種として図説され (I. C., pl. 163, f. 23) ているが大野氏は後 *forma* と取扱れた。大野正男氏は "日本産ハムシ科名録の中でこの種の取扱を整理された (東洋大学紀要, 第13号, 1971)。

その後木元博士は南西諸島におけるこの種の斑紋の変化に就いて図入りで詳しく報告され (昆虫, Vol. 42, 3, 1974. 南の島の生きものたち, 1979), 与那国島産に新に subsp. *yonaguniensis* を命名された。

竹中英雄氏も原色で図説されクスノキ, ナラ, カエデ, モクタチバナ, イタドリを食べると解説されると共にイタドリ, クリの枯れ葉, 新葉をとわず食べ成長したと述べておられる (学研中高生図鑑, 昆虫, II, 1975)。

以上が大体の本種に就いての分類の経緯である。即ち原亜種と2亜種6型が日本から知られているが本州, 九州から南の島々, 与那国島にいたり台湾に迄分布している種と云える。

やゝ南方的な種のようなのであるが本州に於ける分布がどんなものか余り資料が充分でないので調べなかった。たゞ兵庫県下での分布は今迄ほとんど知られていない種のようなのである。

筆者は戦前 (1940) 本種を神戸・鳥原で採集していた。当時出版された平山修次郎氏の原色甲虫図譜 (Pl. 51, f. 45, P. 168) で *C. bissexsignatus* Suffrian モンマダラクビカクシハムシと同定した。併し分布が台湾とだけあるので充分同定に自信がもてず当時の台北帝大の中條道夫博士に御尋ねした所 *C. bissexsignatus* はアッサム, シッキム, ビルマ以外台湾に産するか否か不明にて台湾産でこの学名を使用されていたものは *C. luteosignatus* Pic であるとの御返事を頂きいづれにしても本州からの記録の無い種として1941年自刊した "神戸鳥原甲虫誌, 改定版" に収録しておいた (Fauna British India, Coleop. Chrysomelidae, Vol. 1:242, 1908に *C. bissexsignatus* が図説されている。成程全く違った種である。当時この文献所有していなかった)。

台湾には *C. luteosignatus* も本種 *C. perelegans* も分布している。平山氏の図説されているのはどう見ても *C. perelegans* だと思われる。従って戦前採集していた標本も *C. perelegans* である。原産地が長崎であるが本州からの記録は当時は勿論無かったと考えてよいと思われる。

C. luteosignatus の方は最近 "中国経済昆虫誌, 第18冊, 1980" の中に原色で図説されている。だいぶ違う種のように思われる。

近畿地方からは奈良県の Mt. Gomanodan の記録が見られたが (Bull. Osaka Mus. Nat. Hist., 17, 1964), その他の記録は一寸見られなかった。岡山県での産も見られなかったが広島県では記録がある (すずむし, Vol. 16, 1, 1966)。それによると東京附近の山でも採集出来るが近畿以東のものは別亜種と考えられ原亜種としては広島辺りが北限に近い産地と云えようであるが神戸にも多く産し、奈良あたりにも産するようなので本種の分布はもっと東に延びているのではないだろうか (最近、平野幸彦氏がまとめられた "神奈川県の中甲虫" の中で小田原で記録され、きわめて珍しい、南方系の種とされている, 1981)。

ただ兵庫県では最近飾磨郡家島での記録が報告されたがそれ以外は神戸市内の烏原が知られているのみなのである。但し烏原には6~7月コナラの葉を網ですくうと可成り多く得ることが出来るので恐らく県下の産地はもっともっと他にも広くあると考えている。神戸産のものは原亜種のもので斑紋の変化は今の所見られない。県下の記録は次の通りである。

産地: 飾磨郡家島 [上田, 1981]。神戸市烏原 (lex., VII-1940, lex., 3-VII-1966, lex., 4-VII-1971, lex., 5-VI-1976, lex., 12-VI-1980, lex., 14-VI-1980, lex., 4-VII-1980, lex., 17-VII-1980, lex., 19-VII-1980, lex., 16-VI-1981, lex., 27-VI-1981, 3exs., 1-VII-1981)。

○ *Cryptocephalalus scitulus* Baly, 1873 オオクロスジツツハムシ

本種は Baly 氏により Hiogo (on oak) 産で命名記載された種である (Ent. Soc. Lond., Trans. 1873:89)。1940年には平山修次郎氏が北海道, 本州, 九州に産するとして東京産標本で和名をカシハサルハムシとして原色で図説された (原色甲虫図譜)。1955年には後藤光男氏が分布, 日本全土として長野県産の標本を原色でカシワサルハムシとして図説された (原色日本昆虫図鑑, 甲虫編)。中條道夫博士は詳しい図説を1956年にされている (図説, 食葉はむし類)。分類学的には中條, 木元両博士 (1961), 木元博士 (1965) の報文があり, 中根博士は原色昆虫大図鑑で図説された (1963)。

竹中英雄氏は1975年原色で図説をされている。この中でクリ, コナラ, カシワの葉などを食べ

夜間灯に集まることもあると記しておられる(学研中高生図鑑, 昆虫, II, 甲虫)。

一般的にカシワツツハムシとして良く知られている種である(本報文での和名は大野氏によった, 1971)。日本特産の種のような分布は広いようである。

兵庫県下の分布も割合広く知られている。ただあまり一度に採集出来ず散発的であったが1981年波賀町の水谷に行った時カシワを注意して見ると割合多くいることがわかった。

産地:三原郡論鶴羽山[久松, 1974]。川西市大和[仲田, 1978]。Hiogo[Baly, 1873]。神戸市六甲山(1ex., 10-VII-1955), 布引(1ex., 17-V-1959), 鳥原(1ex., 27-VII-1974)。水上郡柏原, 神楽村[山本, 1953, 1958], 城崎郡但馬[高橋, 1975]。宍粟郡波賀町水谷(6exs., 17-VII-1981), 音水(1ex., 15-VII-1973)。養父郡氷の山(1ex., 24-VII-1956)。美方郡扇ノ山[辻, 1963., 辻, 岸田, 1972]。

○ *Cryptocephalus tetradecaspilotus* Baly, 1873 ジュウシホシツツハムシ

本種はBaly氏により長崎産で新種記載された種である(Ent. Soc. Lond. Trans. 1873: 39)。中條博士は1934年台湾からこの種を記録された(Journ. Soc. Tropic. Agr. Taiwan, VI, 3, 1934)。それ迄本種の日本からの記録をした文献は8つ程あるがいづれもBaly氏の原記載の引用のようである。

草薙忠明氏は1936年四国より始めて本種を記録され(昆虫界, IV, 27, 1936), 中根博士は野尻湖畔産で本州から始めて記録された(昆虫界, X, 1942)。

中国からは中條博士(Mushi, XIV, 2, 1942)並びにChen氏の報告があり(Sinensia, XIII, 1-6, 1942)。更にGressitt, 木元両博士の報告がある(Pac. Ins. Mon. 1A, 1961)。台湾からは中條博士の詳しい報告が出ている(Taiwan Mus. Quart. Jour. 7, 3-4, 1954)。

日本では1955年後藤光男氏による原色での図説があらわれ(若干図が悪いが——, 原色日本昆虫図鑑, 上, 甲虫編), 中條, 木元博士の目録(1961), 中根博士による図説(1963), 木元博士の論文(1964)がある。

竹中英雄氏は1975年原色で図説され本種の生態はよくわかっていないがイタドリで成長するのではないかとされている(学研中高生図鑑, 昆虫, II, 甲虫)。

本種は日本(北海道にはいないようであるが——), 台湾, 支那に広く産し, 兵庫県下でも可成り分布は広いようである。たゞし一度に多く採集することが出来ないが川西市内では多産するところがあるようである(仲田, 1979)。

産地:洲本市安来町[堀田, 1959]。川西市一の島居寒天干場[木元, 日浦, 1971], 東畦野寒天場[仲田, 1979]。Kobe[木元, 1964], 神戸市鳥原(1ex., 25-VII-1958),

大池 (lex., 3-VIII-1940). 神崎郡大河内町川上 (lex., 23-VII-1977). 朝来郡段ヶ峯 [木元, 日浦, 1964]. 氷山郡柏原 [山本, 1953, 1958]. 出石郡床尾山 [高橋, 1963], 養父郡氷の山 (2exs., 25-VII-1955, lex., 27-VII-1956). 美方郡鉢伏山 [高橋, 1975].
(VIII-1981)

パピリオ属の食樹に関する一記録

勝 屋 潤

パピリオの食樹について最近観察した記録を簡単に報告しておく。

1. モンキアゲハ

淡路島などでは栽培されているダイダイ, ユズ, ミカン等に発生するが神戸市に於ては須磨鉢伏山, 一ノ谷などではカラスザンショウについている多数の卵, 幼虫を観察しており, 能勢妙見山でもカラスザンショウで発生していた。

神戸市垂水区は本種が多く見られるが, 自宅附近は海岸線に極めて近くカラスザンショウは見当らないのでミカン類で発生しているのだらうと考えていた。1981年8月に自宅附近の人家のカラタチに産卵中の2♀を発見した。この時の卵を持ち帰り, ユズとサンショウで飼育した(1981.9羽化)。その後, 自宅の鉢植えのユズに発生しているのを確認している。

2. キアゲハ

今までに観察したものは西宮市, 神戸市, 淡路島, 能勢などすべてセリ科植物であったが, 1981年8月に上記モンキアゲハの発生したカラタチで5令幼虫4頭を観察した。

文献等ではミカン科につく事があると書かれているが, 筆者が確認したのは初めてであった。

その後, 卵, 若令幼虫も1981年9月に観察している。

飼育に際してはミカン科, セリ科とも普通に食する。

3. カラスアゲハ

能勢地方では, ほとんどコクサギに発生している。また須磨鉢伏山ではモンキアゲハに混ってカラスザンショウで発生している。

飼育に関してはミカン, ユズ, サンショウ, ダイダイなどどれもよく食する。

1981年9月上記のカラタチに産卵中の1♀を採集。3卵と共に持ち帰り, ユズとサンショウに産